

# NERIC News

## No.303 / 2009年11月号

(1979年創刊・年間10回発行)

Nuclear and Energy-Related Information Centre(NERIC)

核・エネルギー問題情報センター(旧・原子力問題情報センター)

発行人：中嶋篤之助(代表理事) 編集人：吉田康彦(常任理事)

事務局長：舘野 淳(常任理事)

事務局所在地：〒181-0013 東京都三鷹市下連雀3-42-1-505

TEL/FAX 042-247-8581 E-mail : eng-tat@parkcity.ne.jp

HP : <http://www1.parkcity.ne.jp/eng-tat>

郵便振替口座 00120-1-74759

年間購読料 4000円(送料込) 一部頒価 400円(送料別)

### 目次

【巻頭言】	
唯一の選択肢は世界同時の核廃絶	
大西 広	1
【鳩山内閣に提言する】	
①改めてトリウム熔融塩炉の長所を訴える	
古川 和男	2
②早急な対応を迫られるFBR(高速増殖炉)	
大塚益比古	4
③行き詰まる使用済核燃料の再処理政策	
市川富士夫	6
【解説】	
国際オンチの日本人の誤解と過大評価を糾す	
吉田 康彦	7
【TOPICS】【催物案内】【書評】	8

## ■ 巻頭言

### 唯一の選択肢は世界同時の核廃絶

大西 広

朝鮮民主主義人民共和国(以下、北朝鮮)の核問題については、私は2度目の核実験をさせてしまったことにもっと深刻な反省が求められていると考えている。なぜなら、日本などが六者協議の合意を誠実に守っていれば朝鮮側の「六者協議離脱」を阻止できたものが、それをしなかったために北朝鮮は完全な核保有国となってしまったからである。

一度目の核実験は中途半端な実験結果に終わったが、二度目のそれでは実験が完全に成功し、今後の交渉は「核開発の中止」ではなく「保有核兵器の廃棄」へと変わってしまった。

さらに深刻なのは、この二度目の実験以降も米日の強硬姿勢が崩されない中で、北朝鮮はウランの濃縮も行なうと述べ、9月3日には北朝鮮の国連代表部がその実験に成功したと発表したことである。これはテロリストへの核拡散の可能性を一気に拡大したという意味で極めて重大である。

これまでの二度の核実験はプルトニウム爆弾であったため、燃料の取得は簡単でも爆弾製造は極めて困難というものであった。一度目の実験が中途半端に終わったのはそのためである。が、ウラン爆弾は燃料であるウランの濃縮こそ困難ではあっても、爆弾の製造は極めて簡単である。アルカイダなどのテロリストはプルトニウムを入手しても爆弾を製造できないが、濃縮ウランさえ入手できればたとえばニューヨークで核爆発をさせることができる。この意味で核拡散はひとつ大きな曲がり角を迎えた。各種の言動から見てアメリカがもっとも恐れていたこ

とはこのことである。テロリストの活動は中国にもあるから、これは中国が最も恐れているシナリオでもある。

したがって、北朝鮮の核放棄に最大の力を注ぐ中国の姿勢はよく理解できる。今回温家宝首相が北朝鮮に約束した経済支援はかなり大規模なもので、それに応じて北朝鮮が六者協議に復帰することもありえよう。これは大いに歓迎すべきことであるが、かといって「六者協議復帰」からさらに「核放棄」に至るには日米韓口を含むすべての関係諸国の巨額の支援が不可欠の条件となる。「核開発の中止」ではなく、「保有核兵器の廃棄」への我々の要求内容が根本的に変化してしまったからである。そして、これは日本の世論状況を見ている限り、ほとんど不可能な事柄となってしまっている。日本の政権が六者協議にもう少しまともにこれまで対応していれば「核開発の中止」が実現できたであろうものを、それをしなかったためにもたらされた大失敗である。

そのため私は、現在残された最も現実的な選択肢は全世界同時の核廃絶となったと考えている。米、ロ、中、英、仏、印、パ、イスラエルの核保有は許すがそれ以外は許さないという論理はあまりに横柄である。この論理を続けていけば無限の核拡散を抑止できないこと(たとえば10年に一国ずつ保有国が増えてしまうこと)が明らかとなった。オバマの核廃絶宣言もいよいよその認識を認めざるを得なくなったことの反映である、というのが私の理解である。

【京都大学上海センター副センター長】